

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00844

研究課題名(和文) 専門分野の教育を支える言語変種「学術ドイツ語」の習得：「読み」を焦点に

研究課題名(英文) The Process of Learning "German as a Scientific Language" (DaW) in University Education: A Study Focusing on Academic Reading

研究代表者

林 明子 (HAYASHI, Akiko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：60242228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：専門分野の教育を支える学術ドイツ語と2種類の読みという観点から、学生の気づきと学びを深めた本研究の特色は、メタ言語としてのドイツ語と対象言語としてのドイツ語の双方を扱い分析対象としたこと、初修外国語であるドイツ語の基礎から学術ドイツ語の習得へという流れの中で分析的読みやプロソディーの機能を生かした学びを専門分野につなげたことにある。分野間協働は一連の学びのプロセスの総括にあたる。その結果、学術ドイツ語という一言語変種の習得にとどまらず、学生の意識・関心が専門領域そのものにも踏み込んでいくような包括的な学びが実現し、外国語教育の枠を超え、単一の専門分野の枠をも超えた有効性が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語習得の段階・分野ごとの学び・分野間協働を軸に、テキスト分析・教材作成・授業実践・フィードバックの分析に取り組んだ共同プロジェクトである。大学の専門教育におけるドイツ語教育が、「外国語」から「学術言語」へと質的・抜本的な転換を果たすために必要な基礎資料を提供する。分野間協働により、専門の学びの深まりと言語能力の高まりを切り離して考えることはできないこと、言語学習は専門分野の教育を形成する一部であり初級から専門教育まで連続する学びの過程で包括的に学生の気づきを育てることに意義があることが明らかになった。量的な積み重ねにとどまらず、研究・教育の両側面で質的転換を遂げた研究である。

研究成果の概要(英文)：In this project, learning of "German as a Scientific Language" (Deutsch als Wissenschaftssprache: DaW), a variety of German language, and mastering of two types of analytical reading were considered as the basis for study in the bachelor course. To explore student awareness in the learning process of DaW, German as a metalanguage and as a target language were included in the analysis. The pedagogical methods employed were educational practices based on not only two types of analytical reading and prosody-oriented reading but also interdisciplinary collaboration, which proved to be effective beyond the boundaries of foreign language education. The language ability of the students improved from basic German to DaW to an extent where they could apply the various methods of readings to the learning in their major subjects. Besides improving their ability in DaW students also underwent a comprehensive learning experience that led to a deeper understanding of their major disciplines.

研究分野：テキスト言語学、談話分析、語用論

キーワード：学術ドイツ語の習得と専門分野における読み テキスト分析と教材化・授業実践 専門分野の分野間協働 学習者の気づき メタ言語と対象言語 テキストマイニング 音読活動 プロソディーを活用した読み

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、大学の専門教育におけるドイツ語教育が「外国語」から「学術言語」への質的・抜本的な転換を果たすために必要な基礎資料を提供することを目指したものである。申請の背景には、大学の専門分野の研究・教育の中で、長く第2外国語の中核を担ってきたドイツ語の教育体系に潜む問題点、すなわち外国語教育と専門教育の乖離に対する強い危機感がある。外国語学習の枠組みにとどまる限り、言語技能は習得できても専門的な知識や方法論の習得に役立てることは期待できない。そこで、大学におけるドイツ語教育の意味と役割を、専門分野に不可欠な「学術ドイツ語」の習得という視点から捉え直した。そもそも学術言語は母語・外国語を問わず、専門分野の教育を支える言語変種であり、研究に必要な概念・用語・方法論を身につけたり研究成果を発表したりするための媒介語である。学生が「学術ドイツ語」を身につけることは、専門の学びを構成する重要な要素となる。本研究では「読み」に焦点を当て、人文科学の中でも高い言語運用能力が要求される分野間の協働による実証研究に基づいて、各専門分野で用いられる言語変種の分析と、その研究成果を生かす適切な指導方法に基づいて検討することとした。分野間の協働により、外国語教育の枠を超え、単一の専門分野の枠をも超えた有効性を持つ成果が得られることを期待したためである。

### 2. 研究の目的

本研究では言語学・歴史学・文学の3分野を例に「学術ドイツ語」を専門分野の教育と研究を支える言語変種として捉え、「読み」の習得に焦点を当ててその習得のあり方を探る。専門分野でのドイツ語の「読み」について考える際、ドイツ語をメタ言語と捉える「媒介言語としての読み(先行研究、用語の定義、方法論を学ぶ)」と、対象言語と考える「分析対象としての読み(言語データ、史料、文学作品などを分析する)」に大きく区分できると考える。本研究では、双方を分析・考察の対象とする。

専門分野での読解に向けて、語彙・統語・テクストレベルに配慮し、テキストを分析しながら読む力を養うことを念頭に、分析・教材化・授業実践に取り組む。また、分析的な読みや直読直解にもつながる音読活動を授業実践に積極的に取り入れ、学生の気づきを検証する。読解=和訳のように、読解と和訳とを等価のものとしては扱わないというのが、本研究の根底をなす姿勢である。

授業実践で主に対象とするのは、専門分野の授業のほか、学術ドイツ語という新しい言語変種を学び各専門分野へとつなぐ「橋渡し」の役割を担う「ドイツ語原書講読」である。あわせて、初級ドイツ語で身につける基礎的なドイツ語力にも配慮する。学術ドイツ語習得の前提となるためである。

本研究で特に着目するのは、大学教育の中で基礎から専門へ、外国語の教育から学術言語の教育へという二重の橋渡しの時期である。この重要な時期に、専門的な知識を裏付けとして用いながら、学術的なテキストを正確に読み解き、専門的な知識をさらに深めていくために何が必要か、また、単一の専門分野での研究・教育にとどまらない多分野間の連携を、どのように実現するか、その一端を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

研究の大きな流れは、情報収集(先行研究リサーチ・レビューなど)→授業実践に向けての準備(テキスト分析・教材作成)→授業実践(実践データの収集とデータ分析)→分析結果の考察・検証→総括(各実践結果についての情報共有・包括的な視点からの討議)となる。

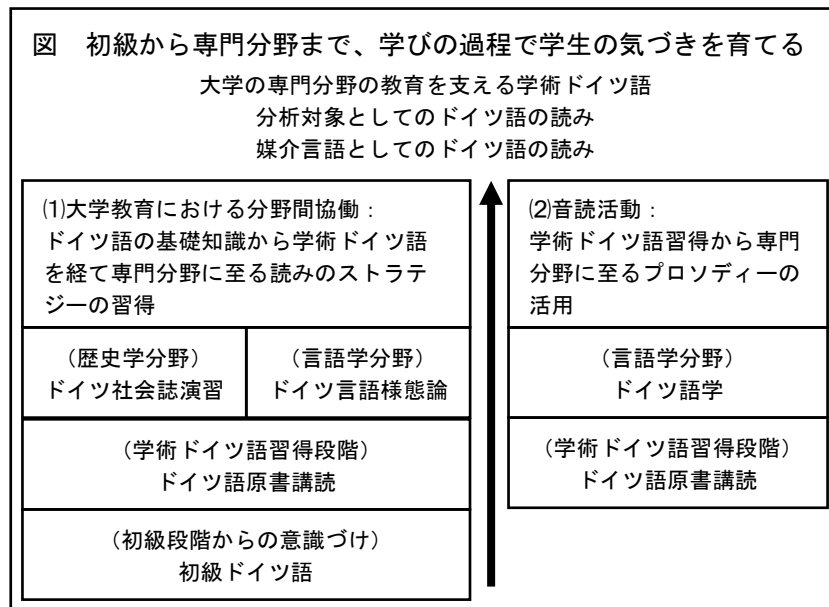
#### (1) テキスト分析・教材作成から授業実践・検証・提案へ

本研究は5人の構成員からなるプロジェクトである。各自が専門とする分野で、それぞれ授業実践に向けた準備と実践を行うと同時に、実践結果については協力して考察・検証に当たった。作業手順の大枠は以下の通りである。

- ① 導入文献および講読テキストの分析から教材化へ
- ② 授業実践と実践結果の検証(分野別そして分野間協同へ)
- ③ 大学の専門教育における学術ドイツ語の習得に関する提案(分野横断的な見地から)

#### (2) 個々の検証から全体の検証へ

プロジェクト全体を通して、大きく2本の柱を立てた。①初級ドイツ語から、橋渡し科目のドイツ語原書講読を経て、専門分野の授業そして分野間協働へと発展する柱と、②プロソディーの機能に特に着目して読みに生かした音読活動の柱である。②についても、①同様、学術ドイツ語への橋渡し科目であるドイツ語原書講読と、専門分野の授業での実践・考察を記す。最終的には、上記2本の柱を統括しプロジェクトの意義を考える(図参照)。



#### 4. 研究成果

ここでは、図に示した授業ごとに研究の成果を紹介するとともに、授業間の連携や全体を通しての共通点および統括について記述する。

##### (1)初級ドイツ語から異なる専門分野間の協働へ

初級ドイツ語では、2年次以降の学術ドイツ語への発展を見据えて、ジグゾー法を活用した読みの活動を取り入れた。初修外国語であるドイツ語初級文法を一通り学び終えた段階で、既習の文法知識を学生が主体的に活用するための学習活動と位置付けられる。実践の結果、習熟レベルに応じたテキストを活用することによって、読みの過程で文法知識を再認識すると同時に、他者との学び合いにおいて自らが主体的に課題解決に臨み、理解を深めようと努める学生の取り組みの姿勢が明らかになった。ジグゾー法による協調学習の中で、語彙・統語レベルの基礎知識に加えて、テキストの全体構造や展開に対する意識が芽生える。初級段階から、学術ドイツ語や読みのストラテジー習得への関心につながる活動としての意味を持つ。

初級から学術ドイツ語への「橋渡し」科目であるドイツ語原書講読では、明示的・意識的に学術ドイツ語を学ぶ。専門分野の読みでは、語彙や統語を運用する力とともに、テキストレベルの新しい知識をも身につけて運用する力が求められる。その段階へと進むために、まずはテキスト言語学の手法を援用して、教材として用いるテキストを分析した。そして、分析結果に基づき作成した課題に沿って、テキストの全体像を俯瞰しながら「分析的に読む」という活動を用意した。学生が能動的にテキストと向き合っ得る気づきを取り上げるべく、毎時の授業へのフィードバックの記録をデータとし、KH-Coderを用いて計量テキスト分析を行った。KH-Coderは、樋口耕一氏が開発したフリーソフトウェアでテキストマイニングのツール（自由記述のような文書形式のデータを定量的な方法で分析し、新しい知識を掘り起こす手法）である。頻出語分析と共起ネットワークの作図をとおして、授業内の一連の作業に対する学生の気づきを探った。その結果、テキスト展開などの形式面でも、トピックセンテンスを見出すなどの内容把握に当たっても、作業を通して得た気づきを他の授業や以前の学びと関連づけ、自分なりの読みのストラテジーを身に付けた様子が観察された。また、学びの成果を、目の前のテキストの読みから発展させ、個々人が関心を持つ領域やゼミなどの専門分野に応用できるものとして捉えたものも見られた。

専門分野では、ドイツ社会誌演習（歴史学）及びドイツ言語様態論（言語学）で、それぞれ、両分野の分野間協働を試みた。両授業で共通に扱ったテキストは政治家の演説であった。当該年度のドイツ社会誌演習のテーマは「東西ドイツの統一」であり、分野間協働に先立ち、分析のための読み（ドイツ語資料などの一次資料）と情報収集のための読み（二次文献）の双方の手法を学んだ。歴史学の基礎知識・専門概念を支えにドイツ語史料を歴史学の手法で読み込み、分析した後で、言語学分野との協働に臨んだ。具体的には、史料の1つ（政治家演説）をテキスト言語学の方法論で分析した結果と付き合わせ、歴史学の授業にどう生かすかを考えるという作業である。分野間協働の結果、異なる分野の観点や分析方法を持ち込むことで学生が自分の分野の特徴に気づき、他と比べることを通して意識される特徴が専門分野への関心の高まりにも通じるという教育的効果が得られた。歴史学分野でのそうした授業実践の結果を受けて、言語学分野のドイツ言語様態論では、言語学のみならず歴史学もしくはその隣接分野を専門としようとする学生が、やがて生の史料に向き合う時に、自らテキストを分析できるようになるための知識や方法論を扱った。授業では、テキスト言語学・談話分析に関係する基礎的な概念と方法論を学んだ後、実際にドイツ語のテキストをテキスト言語学の手法を用いて分析するという手順をとった。授業のまとめとして、社会誌演習と同一の演説テキストを、学生が自律的・主体的に分析し、言語分析の結果を、歴史学の教員を交えた場で披露・討議して歴史学の立場からも考察するという

分野間協働の活動を体験する機会を設けた。分野間協働により、対象言語の分析というレベルでの読みのストラテジーが意識化されるとともに、言語分析の結果得られたテキストの特徴や言語情報を、歴史学研究の文脈に位置付けて「史料」として読むという異なるプロセスでの学びや、テキストとの向き合い方に対する多くの気づきが観察された。

## (2) 講読および専門の授業でのプロソディー活用

本研究のもう一方の柱はプロソディーの活用で、ドイツ語原書講読の授業において音読活動を分析的読みの一助として取り入れた。2020年度については、コロナ禍のオンデマンド式のオンライン授業実施を余儀なくされた時期であったため、モデル音声のファイルを提供することで音声の受容を保証した。音読活動がどのような学びにつながったかについては、個々の学生の音声産出結果に対する教員からのフィードバックではなく、次の形で探ることとした。すなわち、学生自身が自分の音声を録音した結果をモデル音声と、あるいは過去の自分の録音と聴き比べるという作業を通し、内省と気づきに重点を置いた活動を展開する。そして、音声面での気づきが統語構造の分析や内容理解にも役立てられている様子を、7段階に分けて実施した一連の読みのプロセスの中で観察した。当該授業では音読活動を「読解に取りかかる前」「統語構造の分析後」「読解の最終プロセス」の3つの側面で行ったが、読みの理解の段階に合わせてプロソディーを活用できることが明らかになった。なお、音読活動は若干形を変えて2021年度以降の講読の授業でも継続している。定期的かつ継続的に学生が録音した音読ファイルを提出し、学生の気づきについても調査データを収集中であるが、音声分析を含む最終的な分析・考察には至っていない。

プロソディーの機能を用いた音読活動は、専門分野の授業でも取り入れている。今回データを収集した言語学分野の授業では、ドイツ語で書かれた導入文献（言語学入門書）を用いた。ドイツ語を媒介語として、テキスト言語学の概念・専門用語・方法論などを学ぶ。すなわち、メタ言語としてのドイツ語を用いて情報収集するための読みである。同時に、言語学分野では必ずデータの分析例があり、本文に記された方法論を用いて分析を検証することから、分析のための読みも求められる。その場合、ドイツ語は分析の対象言語となる。以上のように2種類の読みを扱う点は、(1)で述べた社会誌演習（歴史学分野）にも通じる。ここで紹介する授業の場合は、テーマがテキスト言語学であったので、表現形式を手がかりに情報の階層性に基づいてテキストの展開や全体構造を把握する練習、文章中に用いられるメタ言語表現に着目する意識づけなども重要であった。本文であれ例であれ、さまざまな読みのストラテジーを用いて、ドイツ語テキストを分析しながら読む体験をする。その一環として音読活動を取り入れ、プロソディーによって統語構造や情報構造を明示化した。プロソディーの機能とともに、専門的な内容のテキスト受容にあたって応用できる読みのストラテジーの活用が、学生のメタレベルの気づきへと発展したが、ことばへの気づきは、メタ言語能力とも言い換えられる。分野を超えて、コードとして用いられた言語を手がかりに、発信されたメッセージを読み解くことで、明示的・暗示的に示されるテキスト産出者の意図を探り、テキスト受容者への働きかけを考える普遍的なストラテジーとなり得る。分野を超えて応用が期待される能力とも言える。以上のようなメタ的な視点が授業実践の軸となっていた。

## (3) 総括と展望／残された課題

本研究は、専門分野の教育を支える学術ドイツ語という切り口から、専門分野で求められる2種類の読みを焦点に、学生の気づきと学びを重視しながら進めてきた。本研究の特色は、①メタ言語としてのドイツ語と対象言語としてのドイツ語の双方の読みを授業実践の中で扱い、分析対象としたこと、②初修外国語として学ぶドイツ語の基礎から学術ドイツ語の習得へという流れとともに、分析的読みや音読活動など、専門分野の学びを見据えた作業体験を、連続する学びのプロセスとして捉えたことにある。一連の学びの連携や継続性については、①初級ドイツ語から橋渡し科目のドイツ語原書講読を経て専門分野の授業・分野間協働へと発展する柱と、②プロソディーに着目して、その機能を読みにかした音読活動の柱に区分して示してきた。各授業実践の間には、分野を超えた共通点、ドイツ語の習得段階にまたがる共通点も見出された。専門分野の授業での分野間協働作業を通じて、学生自身が他分野との差異や共通点を意識するようになった。学術ドイツ語という一言語変種の習得にとどまらず、学生の意識・関心が専門領域そのものにも踏み込んでいくような包括的な学びが実現したと言えよう。

研究開始当初、本研究は、大学の専門教育におけるドイツ語教育が、「外国語」から「学術言語」への質的・抜本的な転換を果たすために必要な基礎資料を提供することを目指したものであった。そして、専門分野間の協働により、外国語教育の枠を超え、単一の専門分野の枠をも超えた有効性を持つ成果が得られることを期待して着手したものであったが、研究の総括にあたり、言語学習は専門分野の教育を形成する一部であり、専門の学びの深まりと言語能力の高まりを切り離して考えることはできないこと、初級から専門分野まで連続する学びの過程で、包括的に学生の気づきを育てることの意義が検証された。そして、ドイツ語習得の段階・分野ごとの学び・分野間協働というさまざまな形で取り組んだ授業実践と、そのための準備として分析・教材作成・フィードバックに5人体制で分担・協力しながら取り組んできた本プロジェクト自体も、量的な積み重ねにとどまらず、研究・教育の両側面で質的転換を遂げたと言える。

今回の研究期間は、コロナ禍に全く重なっていたと言ってしまうのではない。当初計画のように実現できなかった対面でのリサーチ等が多くあった反面、オンラインでの実施を余儀なくされたことが、かえって協調学習につながった側面もある。学生は、授業中、チャットで次々に送られてくる他の学生の気づきを実際に目にするにより、自分の分析や考察結果と比べたり、理解や考えを内省し、深めたり確認したりすることができた。ジグソー法のような体系的な協調学習の教育方法とは異なるが、不自由な対人接触の中でメリットとなったと考えられ、オンライン効果とも言える。音読活動については、学生が産出した音声の分析が残された課題である。また、モデル音声の分析と学生の受容との関係や、分野間協働の成果についてもテキストマイニングなども用いた分析に取り組む必要がある。特に、分野間協働の試みは端緒についたばかりである。今後の大学教育について考えるとき重要な継続課題であり、文学分野との分野間協働も実現させたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 林明子	4. 巻 128
2. 論文標題 メタレベルの「気づき」から探る「読み」の役割 - ドイツ語文献を用いた言語学分野での実験的試み -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『紀要 言語・文学・文化』（中央大学文学部）	6. 最初と最後の頁 129-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 羽根礼華・林明子	4. 巻 99
2. 論文標題 分析的読みの一助としての「音読活動」 - 学術ドイツ語の読解に向けた授業実践 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	6. 最初と最後の頁 81-108頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川喜田敦子	4. 巻 -
2. 論文標題 自国史を越えた歴史教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学文学部実践的教養演習第1部門2020読書する知性「本づくり」演習成果（中央大学出版部）	6. 最初と最後の頁 14 - 26頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川喜田敦子	4. 巻 -
2. 論文標題 2021年連邦議会選挙から考えるドイツの現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『全学共通科目 / 全学共通カリキュラム言語B連続企画 世界を知ろう！ 2021年度講演会筆録』（立教大学全学共通カリキュラム運営センター）	6. 最初と最後の頁 4-23頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西出佳詩子	4. 巻 101
2. 論文標題 ジグソー法を活用してテキストを読む ドイツ語初級クラスでの授業実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	6. 最初と最後の頁 331-352
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川喜田敦子・林明子	4. 巻 22
2. 論文標題 歴史学の授業へのドイツ語史料導入の試み 大学の専門教育における歴史学と言語学の協働	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ヨーロッパ研究』（東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター）	6. 最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西出佳詩子・林明子	4. 巻 104
2. 論文標題 専門分野の学びに向けたドイツ語の分析的読み KH Coderを用いて学生の気づきを探る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 HAYASHI, Akiko
2. 発表標題 How to learn Japanese and German as a "scientific language"? in Panel: Japanese scientific language in the global age.
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies, 24-28 August 2021, Ghent University (Belgium). (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川喜田敦子
2. 発表標題 2021年連邦議会選挙から考えるドイツの現在
3. 学会等名 全学共通科目 / 全学共通カリキュラム言語B連続企画「世界を知ろう！」ドイツ語講演会（立教大学、2021年12月20日）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林明子
2. 発表標題 専門分野における「読みのストラテジー」習得に向けて -テキスト言語学を援用した試み-
3. 学会等名 第13回日本独文学会関東支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川喜田敦子・林明子
2. 発表標題 大学の専門教育における歴史学と言語学の対話と協働 ドイツ語史料をどう読むか
3. 学会等名 日本ドイツ学会第39回大会 フォーラム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	羽根 礼華  (HANE Reika)  (50757789)	中央大学・文学部・准教授    (32641)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂本 真一  (SAKAMOTO Shinichi)  (50847837)	立教大学・外国語教育研究センター・准教授    (32686)	
研究分担者	川喜田 敦子  (KAWAKITA Atsuko)  (80396837)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授    (12601)	
研究分担者	西出 佳詩子  (NISHIDE Yoshiko)  (90817066)	大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・講師    (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関